

氏名	衣笠 秀明
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博甲第 4842 号
学位授与の日付	平成 25 年 9 月 30 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻 (学位規則第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	Risk factors for recurrence after transarterial chemoembolization for early-stage hepatocellular carcinoma (早期肝細胞癌に対しての肝動脈塞栓療法の再発因子について)
論文審査委員	教授 吉野 正 教授 加藤宣之 准教授 貞森 裕

学位論文内容の要旨

肝細胞癌のうち 3cm、3 個以下のいわゆる早期肝細胞癌の治療としてはラジオ波焼灼療法(RFA)と外科手術が標準治療となっているが、RFA がうまくいかなかったときや不可能なときには代替治療として肝動脈化学塞栓療法(TACE)が行われているのが現状である。しかしながら、早期肝細胞癌に対しての TACE の成績報告はなく、早期でありながら標準治療が行えない症例に対してどこまで積極的治療を行っていけばよいかの指標となる報告はない。そのため、今回の報告では早期肝細胞癌でありながらも TACE を行わざるを得なかった症例に着目し、その再発、特に局所再発と異所再発のリスクファクターについて検討を行った。対象は岡山大学病院で新たに肝細胞癌と診断された 1560 症例のうち、早期肝細胞癌にもかかわらず姑息治療として TACE だけを施行された 43 症例を対象とした。結果は局所再発率としては 3 ヶ月 6 ヶ月 12 ヶ月の局所再発率は 18.6%、33.4%、61.8%、異所再発率は 2.8%、2.8%、34.3%であった。局所再発のリスクファクターとしてはリピオドールの沈着有無と腫瘍マーカーの 1 つである DCP の増減があげられ、また異所再発のリスクファクターとしては多発腫瘍があげられた。これらの結果から、早期肝細胞癌の標準治療逸脱症例に対して、姑息治療としての TACE 治療を選択する上での新たな指標が示された。

論文審査結果の要旨

本研究は早期肝細胞癌に対して動注化学療法の再発リスクファクターを検討したものである。現在同療法はラジオ波焼灼療法が適用できない場合に選択されるが、再発についての検討は十分されていない。岡山大学病院で肝細胞癌と診断された 1560 例のうち早期でありながら動注化学療法された症例 43 症例を解析した。その結果、3 か月、6 か月、12 か月の局所再発はそれぞれ 18.6%、33.4%、61.8%であった。局所再発のリスクファクターとしてはリピオドールの沈着の有無と腫瘍マーカーのひとつである DCP の増減があり、異所性再発としては多発腫瘍が認められた。

実験の目的、手法、結果とその解釈とも適切になされており、早期肝癌治療に関する重要な知見を得たものと評価される。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。